

たどつ の むかし

Vol. 24 令和2年6月1日発行

「四国遍路の貢献者：宥辨真念の道標石」

昨年度末に見つかった新出資料を紹介し、写真は遍路道沿いに置かれる道標石のひとつです。

宥辨真念とは江戸時代の中期ごろに活躍した大坂の人物で、「遍礼屋の開設」、「道標の設置」、「遍路関係書の出版」などを行い、現在にいたる遍路道の順路を確立した人物です。

『四国遍路功德記』（元禄三年：1690）には「四国のうちにて、遍礼人宿なく艱難せる所あり。真念是をうれへ、遍礼屋を立、其窮勞をやすめしむ。又四国中まざれ道おほくして、佗邦の人岐にたゞずむ所毎に標石を立る事二百余石なり。かくのごとくの功、前来聞事なし。出せる所の道指南は、おほくの人にたよりし、・・・略」とあり、県内では以前までは12基の真念道標が確認され、今回発見された真念道標が県内13基目となります。



宥辨真念の道標石

現在にいたる遍路道の順路を確立した人物です。

現状では上部の1/3～1/4のみ残存しています。刻まれている文字の正面は

「左扁ん」とあり、「路みち」と続くと考えられます。右側面は「瓦南無」とあり、「大師遍照金剛」と続くと考えられます。梵字は「瓦(ア)」であり、胎蔵界における大日如来を示しています。そして左側面は「為父母六親(父母六親の為)」と刻まれています。この道標そのものでは施主は確認できませんが、この文言の組合せが他の寺院で見られる真念の道標石と同形式であるため、これもおそらく真念のものであると判断しました。発見場所は北鴨にある宇多姫神社内に置かれていたということで、道路の拡幅等で、別のところから移動してきたものでないかと考えられます。もともとの設置場所は、発見場所の近くの、多度津においては港(堀江津)から、遍路道に合流するルートが支道としてあったと考えられ、港から遍路道に向かい、南北の道を南下して進む際に、左折して道隆寺に向かうことが考えられるため、港からの接続部分に設置されたのではないかと考えられます。

